

特別講演 1

「かかりつけ医の立場から考える日常診療において 気を付けるべき CKD 患者像および医療連携の在り方について」

ふくだ内科クリニック院長
福田 正博 先生

慢性腎臓病（CKD : Chronic Kidney Disease）の有病者数は本邦において 1,480 万人以上とも推定されており、新たな国民病ともいわれています。

CKD は進行性かつ不可逆的な病態であるため治療介入が遅れると透析や腎移植が必要となり患者自身の QOL の低下だけでなく、医療経済的にも大きな社会問題となっています。加えて CKD は透析のリスクだけではなく、心筋梗塞や脳卒中、心不全などの心血管疾患障害 や死亡のリスクを上昇させることが国内外の多くの臨床研究より示されています。しかし CKD は初期には自覚症状がほとんどないため、特定健診等の受診で異常を発見し、異常があればかかりつけ医に受診、そして必要があれば速やかに腎臓専門医へ紹介するといった一連の地域での医療連携が不可欠です。

今回は糖尿病性腎臓病を中心とした病態について取り上げ、上記のイベント抑制や臓器保護の観点から考える食事指導の考え方や、留意すべき糖尿病治療薬、特に早期介入が必要な患者像について触れていきたいと思います。また地域連携の実際として大阪府内科医会での取り組みもご紹介したいと存じます。